

2014 年度 私立大学図書館協会 海外認定研修報告書

ドイツの大学図書館の見学と調査
～「学びの場」としての図書館の役割に着目して～

獨協大学図書館
高島 豊

目次

I はじめに(動機にかえて)	2
II ドイツの図書館訪問の目的	2
III ドイツの大学図書館訪問についての報告	3
III-1 デュースブルク=エッセン大学人文科学・人文社会学専門図書館	3
III-1-1 大学、および訪問図書館の基本情報	3
III-1-2 図書館見学	3
III-1-3 グラフ氏との情報交換	7
III-2 ブレーメン大学州立図書館	7
III-2-1 大学、および訪問図書館の基本情報	8
III-2-2 図書館見学	8
III-2-3 ミュラー氏、ポーテム氏との情報交換	11
III-3 ミュンスター大学州立図書館	12
III-3-1 大学、および訪問図書館の基本情報	12
III-3-2 図書館見学	12
III-3-3 シュタイナー氏との情報交換	15
III-4 マールブルク大学図書館	16
III-4-1 大学、および訪問図書館の基本情報	16
III-4-2 中央図書館の見学	16
III-4-3 神学部図書館の見学	18
III-4-4 レクチャー:「学びの場」としての図書館	20
III-4-5 新図書館の紹介	21
IV 「学びの場」としてのサービス、施設についてのまとめ	21
V 帰国後のアンケート調査	22
V-1 カフェテリア(飲食エリア)を図書館内に設置することについて	23
V-2 レファレンスの在り方について	23
V-3 ゾーニングについて	24
V-4 「学びの場」の展望について	25
V-5 延滞対策	25
V-6 館内での利用者のリフレッシュについて	26
VI おわりに	27
VII 参考文献、および URL	28

I はじめに(動機にかえて)

2010年8月にドイツのマインツ大学、およびボン大学を訪問し、大学図書館を見学させて頂いた(2011年度私立大学図書館協会海外認定研修報告書参照)。この時の訪問で、国が違うことにより、日本とは発想の異なるサービスや利用者対応が多くあることに大変興味を持ち、また機会があれば外国の図書館を訪問したいと考えていた。

この度、再びプライベートでドイツを訪れる機会を得たため、この思いを実現すべく、下記の4つの大学の大学図書館を訪問し、館内を見学させて頂いた。

- ①8月22日(金)デュースブルク=エッセン大学人文・社会科学専門図書館
- ②8月25日(月)ブレーメン大学州立図書館
- ③8月25日(月)ミュンスター大学州立図書館
- ④8月26日(火)マールブルク大学中央図書館

上記4大学は、筆者の勤務する獨協大学と交流協定を結んでおり、筆者が2009年まで所属していた国際交流センターで業務上頻りにコンタクトを取っていたため、訪問受入れのアポイントメントも比較的容易に取ることができ、現地でも手厚い対応をして頂くことができ、大変有意義な訪問となった。

II ドイツの図書館訪問の目的

昨今における図書館は、長時間滞在ができる「学びの場」としての役割が重視されている。筆者は2009年より獨協大学図書館の閲覧係で主として利用者サービスを担当している。また2012年～2013年度の私立大学図書館協会東地区部会研究部において「パブリック・サービス研究分科会」に参加し、研究分科会の活動として、昨今の多様化した利用者のニーズに応えるべく全国の大学図書館で行われている新しいサービスについて調査・研究を行い、その成果を冊子「はじめてみよう！図書館サービス・スタートブック」としてまとめた。この冊子作成に当たり、筆者は主に図書館の施設・設備面での利用者ニーズへの対応について調査を行い、全国の図書館での様々な取り組みについて知ることとなった。

このため、今回のドイツの図書館訪問においては、「学びの場」として、利用者が快適に滞在できるエリアを重点的に見学させて頂き、これについて各大学図書館で利用者サービスに携わるスタッフの意見や考えを伺うことを主な目的とした。

本報告書では、まず訪問した4つの大学図書館についてそれぞれ訪問順に報告を行い、次に、それらの図書館でそれぞれに実施されている「学びの場」としてのサービス・施設について包括的なまとめを行い、最後に、帰国後に「学びの場」に関連して実施した各図書館担当者へのアンケート調査の回答と、それについての簡単な考察を記した。

Ⅲ ドイツの大学図書館訪問についての報告

以下に、今回訪問したドイツの4つの大学図書館についての報告を記す。

Ⅲ-1 デュースブルク=エッセン大学人文科学・人文社会学専門図書館

デュースブルク=エッセン大学人文科学・人文社会学専門図書館レファレンス・ライブラリアンのドロテー・グラフ氏(Frau Dorothee Graf)に図書館内を案内して頂き、その後個別にお話を伺った。

Ⅲ-1-1 大学、および訪問図書館の基本情報

大学名	デュースブルク=エッセン大学 Universität Duisburg-Essen
大学 URL	https://www.uni-due.de/
所在地	ノルトライン=ウェストファーレン州 デュースブルク市、エッセン市
創立年	1972年に創立のデュースブルク大学、エッセン大学が2003年に合併
学部数	11学部
学生数	約39,000名
図書館数	6館
日本の協定校	九州大学、同志社大学、神奈川大学、名古屋大学、龍谷大学、上智大学、東京大学、筑波大学、山形大学、獨協大学

図書館名	デュースブルク=エッセン大学人文科学・人文社会学専門図書館 Fachbibliothek GW/GSW
創立	1970年代
蔵書数	2,532,096冊
開館時間	平日:8:00~22:00 / 土日:10:00~20:00
閲覧席数	2,044席
年間入館者数	2,225,653名

Ⅲ-1-2 図書館見学

デュースブルク=エッセン大学人文科学・人文社会学専門図書館はエッセンキャンパスにあり、大学で最大規模の図書館である。写真1-①の1~3階部分が図書館エリア。



写真 1-①

入退館ゲート前の広いスペースにはカバン類を預けるためのロッカーが並んでいる(写真 1-②)。

ドイツの図書館では従来カバン類はデポジット式のコインロッカーに預けるのが一般的だった。しかし、館内で本やノート、パソコンなど勉強道具を抱えて持ち運ばねばならないのは非常に不便で、利用者からもカバンの館内持ち込みを要望する声が強くなり、図書館員の間で長い議論の末、2012年よりカバン類の館内持ち込みが認められるようになった。



写真 1-②

このため、ロッカーの利用率はその後大幅に減ったとのこと。

使われなくなったロッカースペースを利用者のための別の用途として有効活用できるのではないかという質問に、この場所は図書館の管轄ではないため、図書館だけで決めることはできない、とのことだった。

館内要所に掲示しているQRコード(写真 1-③)で、館内施設や資料の利用案内を音声ガイドで聴くことができるようになっている。図書館は学生だけでなく、広く一般市民にも開放されており、初期対応のオリエンテーションとして有効活用されている。



写真 1-③

メインカウンター付近(写真 1-④)と PC 利用席(写真 1-⑤)。大学は夏休み中であったため、席には余裕があったが、授業期間中の閲覧席不足は常態化しているとのこと。



写真 1-④



写真 1-⑤

写真 1-⑥は、学生証やプリペイドカードのチャージ & 支払機。学生証にはプリペイド機能が付いていて、これで資料の複写や印刷、延滞金の支払い、有料のPCガイダンスの支払いなど、図書館内で発生する支払いに利用できるほか、学食や売店など、図書館外でも広く利用することができる。



写真 1-⑥

写真 1-⑦は、グループ学習利用ゾーンの掲示で、「みんなが気持ちよく利用できるようお静かに！」と呼びかけている。この掲示のように、館内にはシンプルなピクトグラムを使った掲示を多く見かけた。



写真 1-⑦

写真 1-⑧と⑨は、グループ学習利用ゾーンの様子。スペース的にはまだまだ余裕があるように見えたが、授業が始まると満席になることも多く、部屋の隅には追加用の椅子が重ねられていた。



写真 1-⑧



写真 1-⑨

図書館資料を個人利用のために一定期間図書館内に確保しておく方法として、①短期間資料保管棚 ②資料保管用ロッカー ③図書館資料ワゴンがある。

①短期間資料保管棚(写真 1-⑩)には、貸出手続きを行っていない資料を一人 5 冊まで 3 日間確保することができる。備え付けのメモに利用開始日を記入して資料に挟んで利用する。写真 1-⑪は卒業・修士・博士論文作成中の学生用の個人専用のワゴンで、貸出手続きを行った資料の

他、私物の勉強道具などを入れ、施錠して6か月まで館内で自由に使うことができる。

②として挙げた資料保管用ロッカーは①と③の中間的なもので、図書館資料や私物の勉強道具を館内に最長4週間保管しておくことができる。こうしたロッカーやワゴンは、今回訪問したドイツの4つの大学図書館全てに設置されていて、図書館を長時間、或いは長期間に渡り個人的な勉強スペースとして利用するためのアイデアである。



写真 1-⑩



写真 1-⑪

館内には図書館資料をデジタル媒体で利用したいユーザーのために、スキャンステーションがあり、写真 1-⑫のようなブックスキャナを自由に利用できる。スキャンしたデータは無料で持参のUSBスティックに保存したり、Eメールに添付して送ることができる。ブックスキャナは、今回訪問したドイツの4つの大学図書館全てに設置されていた。

日本の図書館では資料の複写をする際も、複写申請書を提出するなど著作権への配慮が求められるが、複写よりも更にデジタルデータとして自由に



写真 1-⑫

利用できるスキャナについても、利用のルールを周知する掲示等は見かけなかった。この点について案内してくださったグラフ氏に尋ねたところ、「著作権法上、資料の全てのページをスキャンするようなことはもちろんできません。」とのことだった。

写真 1-⑬は、館内に設置されている開館時間内に利用できる資料返却ポスト。紙媒体の資料を入れる返却口と、CD や DVD など電子媒体の資料を入れる返却口が分かれている。



写真 1-⑬

閉館時の返却用に、同じタイプの返却ポストが館外にも設置されていた。

館内ツアーの最後に、資料修理工房を見学させて頂いた(写真 1-14)。ここでは、専門のスタッフが資料の修理のほか、簡易製本などを行っている。

部屋には修理・製本機器やブックスキャナ、様々なタイプの色紙や布地などが揃っていて、本格的な工房として活用されている様子が窺えた。



写真 1-14

Ⅲ-1-3 グラフ氏との情報交換

一時間以上に渡り館内を案内して頂いたあと、「学びの場としての図書館」について、そして、学生を対象に行われている「書き方講座」について、40分ほどグラフ氏から個別にお話を伺った。以下はグラフ氏から伺った話の要旨である。

様々な閲覧席や休憩スペースなど、利用者の用途に合わせて身体的に快適に過ごせる場の提供を求める声が、2011年に行ったアンケート調査で利用者から多く寄せられた。これについては図書館として改善に努めているが、それと並び、学びの場としての情報提供の在り方も重要で、レポート・論文の書き方をサポートしている。専門の相談員によるオフィスアワーを設けているほか、学期毎に朝から夕方まで終日に渡って「書き方講座」を行っている。ここでは「レポートのテーマの選び方」「参考文献の探し方」「時間の有効活用法」など、書き方に関するあらゆるテーマについてのセミナーが開催され、希望するテーマを自由に受講することができる。

Ⅲ-2 ブレーメン大学州立図書館

ブレーメンでは、まず獨協大学の協定校であるブレーメン専門単科大学(Hochschule Bremen)の大学図書館に、同図書館長のマルティナ・フィッケン氏(Frau Martina Ficken)を訪ね、図書館内を簡単に案内して頂いた後、フィッケン氏と共にブレーメン大学(Universität Bremen)のキャンパス内にあるブレーメン州の4大学共通の州立図書館¹へ移動し、同図書館長のマリア・エリーザベト・ミュラー氏(Frau Maria Elisabeth Müller)、利用者部門長のクラウディア・ボーデム氏(Frau Claudia Bodem)も加わり情報交換を行い、その後館内を案内して頂いた。

¹ ブレーメン大学州立図書館は、上述の2大学のほか、ブレーメン芸術専門単科大学(Hochschule für Künste Bremen)、ブレーマーハーフェン専門単科大学(Hochschule Bremerhaven)を加えたブレーメン州内4大学にとっての中央図書館の役割を持っている。

Ⅲ-2-1 大学、および訪問図書館の基本情報

大学名	ブレーメン専門単科大学 Hochschule Bremen
大学 URL	http://www.hs-bremen.de
所在地	ブレーメン市
創立年	1982 年
学部数	5 学部
学生数	約 8,600 名
図書館数	9 館
日本の協定校	愛知大学、南山大学、明治大学、お茶の水女子大学、立命館大学、龍谷大学、静岡大学、上智大学、多摩大学、津田塾大学、早稲田大学、獨協大学

図書館名	ブレーメン大学州立図書館 ² Staats- und Universitätsbibliothek Bremen
竣工年	1974 年(書庫増築 1998 年, 改装 2002-2004 年, 1 階部分改築: 2013 年)
蔵書数	3,407,391 冊
開館時間	平日: 8:00~22:00 / 土日: 10:00~18:00
閲覧席数	490 席
年間入館者数	1,273,930 名

Ⅲ-2-2 図書館見学

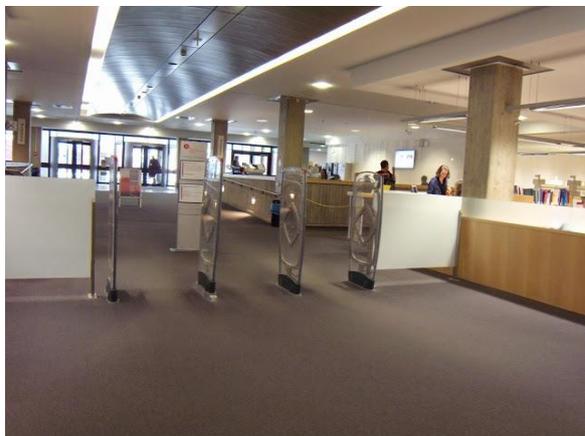


写真 2-①

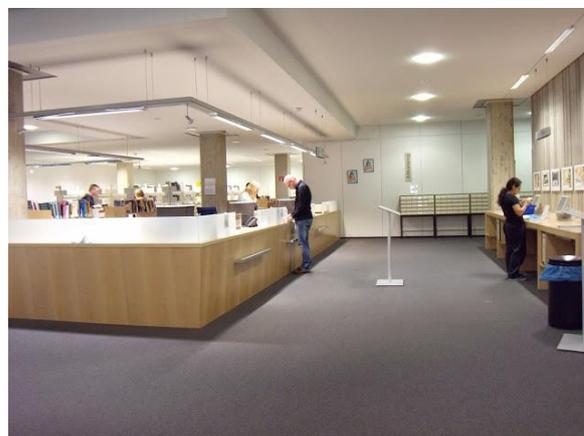


写真 2-②

写真 2-①は 1 階メイン入退館ゲート。ドイツの大学図書館は一般市民へも広く開放されているため、入館時の認証は行われていない。写真 2-②は、ゲートを入ったところにあるメインカウンター。とても広々としていて、カウンターの利用者側にはトレーが設置され、気配りが感じられる。

² ブレーメン州はハンザ都市州であるため、「州立」に当たるドイツ語表記は"Staats-"となっているが、「国立」の意味ではない。

写真 2-③赤丸印内にある赤いカードは、離席時に一時的に席を確保するための時刻表示盤。駐車時間が制限されている路上に駐車する際に車内に置く表示盤をイメージしていることから「駐車表示盤」"Parkscheibe"と呼ばれている。表示の時刻から30分間席を確保できる。閲覧席の不足はどの大学図書館でも悩みの種で、表示盤のアイディアは多くの大学図書館が取り入れているとのこと。



写真 2-③

写真 2-④と⑤は、デュースブルク=エッセン大学の図書館にもあった個人用ロッカーとワゴン(6 ページ参照)。どちらも最長で180日間利用できる。飲食物など、入れることが禁止されているものがあり、中のものが見えるよう透明の扉になっている。



写真 2-④



写真 2-⑤

各フロアは中央部分の書架エリアを取り囲むように閲覧席が配されるレイアウトで統一され、資料は主題毎に各フロアに分けられている(写真 2-⑥)。フロアには個人用ワゴンがあちこちに置かれているのが見られた。写真 2-⑦は、閲覧席エリアの周りに設置されている屋上テラス。テラスからは良い眺めを楽しめ、リフレッシュすることができる。



写真 2-⑥



写真 2-⑦

写真 2-⑧はグループ学習室。公園のベンチをイメージした長椅子を置き、隣同士で相談しやすい雰囲気を作っている。写真 2-⑨は耳栓の自販機。周りの話し声や騒音が気になる場合は自己防衛を促している？この自販機は他の図書館でも見かけた。



写真 2-⑧



写真 2-⑨

写真 2-⑩は、以前は事務局だったスペースをリフォームしたガイダンス・スクーリング用のPC付き教室。

最後に、2014年10月の新学期開始に合わせてオープンする予定の新設エリアを案内して頂いた。写真 2-⑪はゾーニングされたグループ学習スペース。壁には大型のディスプレイが設置される予定。物音や相談する声が響かないように天井材や床材には音を吸収しやすい素材を採用したとのこと。

写真 2-⑫はラウンジ・ブラウジングコーナー。ゆったりしたソファに落ち着いた色のクッション、壁面いっぱい書架を設けてあり、リラックスした気分で読書を楽しめる空間になりそうだ。



写真 2-⑩



写真 2-⑪



写真 2-⑫

長年の念願だったというカフェテリア(写真 2-⑬)もオープンする。隣接するエリアとはガラス壁で仕切られて、透過性が重視されている。カフェテリア内には自販機だけでなく、カウンターでスタッフがコーヒーや軽食を提供する。「館内で飲食できる場所をようやく確保できました。自販機だけでなく、淹れたてのおいしいコーヒーを提供することにもこだわりました。」と館長のミュラーさんは満足そうに話してくださいました。



写真 2-⑬

Ⅲ-2-3 ミュラー氏、ポーテム氏との情報交換

館内を案内していただく前に、ミュラー氏とポーテム氏から、図書館でのスクーリングについて、快適な館内施設の条件について、館内での飲食についてお話を伺った。以下はその要旨。

情報検索のためのガイダンスは、大学入学資格取得を目指し、論文作成が課せられている高校生³を対象にしたものも行われている。大学生に対してのガイダンスにももちろん力を入れている。最近では教員の情報検索ガイダンスへの要望が増えているが、教員にまでは十分なガイダンスが行えていないのが現状である。

図書館内で目的に応じた場所を利用者に提供するためには、大きな閲覧ホールよりも目的ごとにゾーニングを行うことが望ましい。また、利用者が落ち着いてリラックスできるために、壁や床の色や、書架や机、椅子の形状や材質にも気を配る必要がある。

館内での飲食については長年大きな議論の対象となっていた。飲み物や食べ物により図書館資料が汚損する、ということで反対する人が多いが、家では、借りていった本を飲み食いしながら読むことになるのでそれほど重要とは思わない。むしろ、飲食による床などの汚れに神経を配るべきで、新設されるカフェテリアでは汚れが落ちやすい素材を採用した。

開館時間が拡大することで、キャンパス内で飲食可能な場所の確保が重要になっているが、夜間などは図書館以外で飲食可能な場所がないため、館内にそのためのスペースを設けることは急務であった。今回は飲食スペースを設けただけでなく、淹れたてのコーヒーをサービスできるようにしたのは、館内での飲食場所確保という物理的な必要性のみならず、利用者にとっての快適性を重視したためである。

³ ドイツの教育制度に照らせば、正確には「高校生」ではなく「ギムナジウム生」と記すべきところだが、便宜上「高校生」とした。

Ⅲ-3 ミュンスター大学州立図書館

ミュンスター大学州立図書館利用者サービス担当のカトリン・シュタイナー氏(Frau Katrin Steiner)に図書館内を案内して頂き、その後個別にお話を伺った。

Ⅲ-3-1 大学、および訪問図書館の基本情報

大学名	ミュンスター大学 Westfälische Wilhelms-Universität Münster
大学 URL	www.uni-muenster.de/
所在地	ノルトライン＝ウェストファーレン州北部 ミュンスター市
創立年	1780 年
学部数	7 学部
学生数	約 40,800 名
図書館数	108 館
日本の協定校	国際基督教大学、青山学院大学、獨協大学

図書館名	ミュンスター大学州立図書館 Universitäts- und Landesbibliothek Münster
竣工年	1973 年(改装・増築:2009 年)
蔵書数	3,222,463 冊
開館時間	平日:8:00～22:00 / 土日:10:00～20:00 試験期間および学期の始めは平日:8:00～24:00
閲覧席数	936 席
年間入館者数	1,344,288 名

Ⅲ-3-2 図書館見学

州立図書館も兼ねているミュンスター大学中央図書館は、2009 年に大規模な改築・増築が行われた。ガラス張りのエントランスホール(写真 3-①)は増築部分で、ここの外壁に掲げられた照明付きのロゴ"Gehorche keinem!"とは、「むやみに人に従うな!」という意味。「情報を批判的に捉え、大きな視点で物事を見て、既成の考えに疑問を唱え、新しいものを生み出せ!」というメッセージが込められている。



写真 3-①

入退館ゲート手前にあるコインロッカーと、利用者カードチャージ&支払機(写真 3-②)。ここではバッグやリュックなどは入館前にロッカーへ預けなければならない。デポジットとして 2 ユーロが必要だが、この支払機ではプリペイドカード(学生証)を使って専用コインを購入することもできる。

支払機は館内にも設置されており、カードは他大学図書館同様、複写や印刷、延滞金の支払い、学内他施設共通で使える。

写真 3-③は、PC設置閲覧席とグループ学習ができる閲覧席のあるホール。自然光を多く採り入れて明るく開放的な雰囲気になっている。写真 3-④は静粛ゾーン。ここでは電子機器の利用も禁止され、静粛が保たれている。



写真 3-②



写真 3-③



写真 3-④

写真 3-⑤はブレーメン大学の図書館でも採用されていた閲覧席の一時確保用「駐車表示盤」。離席が可能なのは通常は 30 分まで、12 時～14 時の間は 60 分。写真 3-⑥は分別型のごみ箱。



写真 3-⑤



写真 3-⑥

写真 3-⑦は、「デジタル工房」"DigiLab"と呼ばれる部屋で、画像や映像、音声を編集する各種機器が設置されており自由に利用できる。これらを利用して発表用資料や教材などを作成できる。館内の床には写真 3-⑧のような分かりやすい案内表示が随所に出ている。緊急災害時にも分かりやすい案内になるように、ということを中心としたこと。

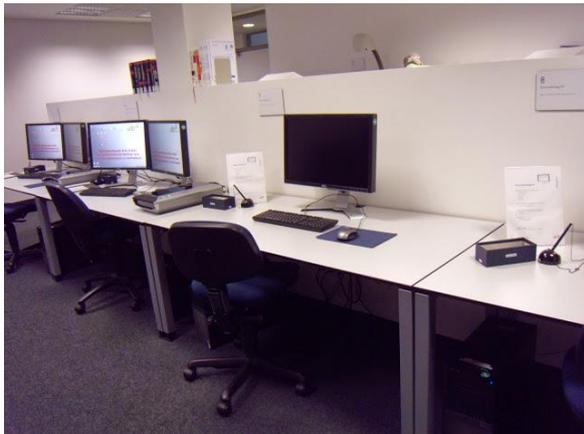


写真 3-⑦



写真 3-⑧

写真 3-⑨は子連れの利用者のための親子室。おむつ交換台や洗面台が完備していて、子供の様子を見ながら、資料閲覧や研究・学習ができるスペース。部屋には、おもちゃやベビーカースペースもある。空いていればカウンターで鍵を受け取っていつでも利用できる。「常に子供と同伴してください」との注意書きあり。これも図書館を誰もが利用しやすい場とするためのサービスである。



写真 3-⑨

写真 3-⑩と⑪は改築・増築工事の際に新設されたカフェテリアの様子。カフェテリア内には当日の新聞が壁に掛けられ、飲み物と食べ物の自販機がある。また壁面は学生の作品(写真など)の展示スペースとして使われている。貸出手続きをしていない図書館資料の持ち込みも可。ブレーメン大学図書館でも図書館リニューアルの機会を利用してカフェテリアができたが、利用者が図書館で長時間快適に滞在することができるこのような施設の設置が、ドイツの大学図書館では高い優先順位で実行されていることを実感した。



写真 3-⑩



写真 3-⑪

写真 3-⑫は閉架書庫資料の資料配送システム。コンピュータ制御による自動化書庫システムではなく、利用請求のあった資料の出納等で使用され、システムの操作は図書館スタッフが行う。「これが出来て運動量が減りました。」

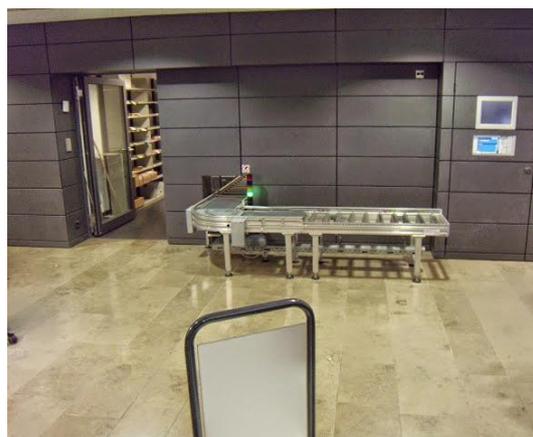


写真 3-⑫

見学の最後に写本(貴重書)閲覧室(写真 3-⑬)を案内して頂き、常駐スタッフのユルゲン・レンツィング氏(Herr Jürgen Lenzing)に以下のお話を伺った。

ミュンスター大学州立図書館には 800 点以上のインキュナブラや歴史的価値のある写本、自筆原稿等を所蔵・管理しており(写真 3-⑭)、それらの資料はこの閲覧室でスタッフ監督の下で閲覧できる。開室時間は火曜日から金曜日までの 10 時から 17 時で、閲覧を希望する場合はできるだけ事前に予約することが望ましい。資料のコピーは不可だが、デジタルカメラでの撮影は許可している。また、資料のデジタル化の作業を進めており、特に現物を確認したい、ということであれば、デジタル資料を提供している。



写真 3-⑬



写真 3-⑭

Ⅲ-3-3 シュタイナー氏との情報交換

図書館内を見学したあと、見学に同行して下さったシュタイナー氏から、図書館が行っている学生のための「学習支援週間」について話を伺った。ここでは、「課題にどのように取り組んでよいかわからない」「文章をどのように組み立ててよいかわからない」「参考文献の探し方がわからない」、或いは単に「一人でパソコンと奮闘するのが嫌だ」など、どんなことでも自分の課題について相談することができる。「図書館は本との出会いだけでなく、人との出会いの場」をモットーに、通常のレファレンス対応とは別に、各学期の終わりに専門の相談員チームにより支援を行っているが、利用者数は残念ながらとても少ない、とのことであった。

Ⅲ-4 マールブルク大学図書館

マールブルクでは、次の4つの内容について、各担当者による説明、案内をして頂いた。

- ①2017年竣工予定の新図書館の紹介／担当：ユッタ・ロイター氏(Frau Jutta Reuter)
- ②中央図書館の見学／担当：ベルベル・シェーファー氏(Frau Bärbel Schäfer)
- ③レクチャー：「学びの場」としての図書館／担当：リディア・カイザー氏(Frau Dr. Lydia Kaiser)、ガブリエーレ・プレシュケ氏(Frau Gabriele Plaeschke)
- ④神学部図書館の見学／担当：カロリーナ・ドルンドルフ氏(Frau Karolina Dorndorf)

本稿では、上記の説明・案内について②④③①の順で報告を行う。

Ⅲ-4-1 大学、および訪問図書館の基本情報

大学名	マールブルク大学 Philipps-Universität Marburg
大学 URL	www.uni-marburg.de/
所在地	ヘッセン州中部 マールブルク市
創立年	1527年
学部数	16学部
学生数	約26,000名
図書館数	38館
日本の協定校	東洋大学、天理大学、東京外国語大学、獨協大学

図書館名	マールブルク大学中央図書館 Zentralbibliothek der Universität Marburg
竣工年	1967年
蔵書数	約190万冊
開館時間	平日、土日：8:00～24:00
閲覧席数	546席
年間入館者数	19,384名(年間利用者数)

Ⅲ-4-2 中央図書館の見学

中央図書館正面入り口(写真4-①)と、入退館ゲート手前のコインロッカー(写真4-②)。1967年に建造された図書館で外観は落書きなども目立つが、館内はきれいにリフォームされていた。



写真 4-①



写真 4-②

自動貸出機(写真 4-③)はICタグ読取方式。約190万冊の蔵書はICタグにより管理されている。

写真 4-④と⑤は自動返却機を利用者側と事務所側からそれぞれ見た様子。自動返却機に置かれた資料はベルトコンベアで事務室内の台車に乗せられる。底板に重みがかかると沈んでいく仕組み。

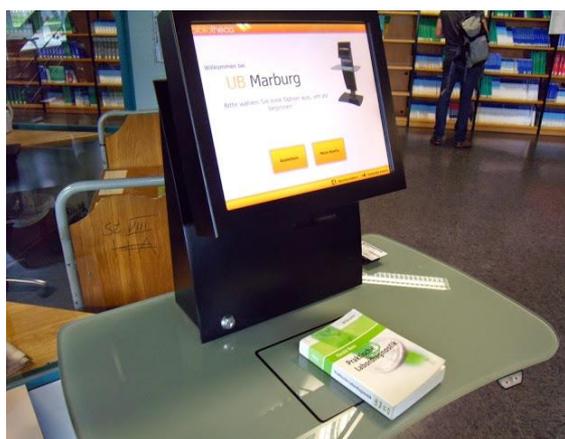


写真 4-③



写真 4-④



写真 4-⑤

写真 4-⑥は、他の図書館でもよく見かけた館内で長期間(最長1か月)利用できる個人用ロッカー。扉は各自利用者が持参した錠前で施錠されている。ロッカーは毎月第1水曜日までに一旦空にしなければならず、期日を過ぎても使用を続けていると、錠前を壊してでもロッカー内は空にされる。閲覧席はやはり授業期間中は不足しており、階段ホールにも閲覧席が設けられていた(写真 4-⑦)。



写真 4-⑥



写真 4-⑦

写真 4-⑧は、利用希望のあった閉架書庫資料の取り置き棚。請求後約 1 時間以内にこの棚に届けられ、申請者がセルフでここからピックアップする。



写真 4-⑧

写真 4-⑨はカフェテリアの様子。館内の飲食は長年議論されていたが、スタッフの熱意で 2013 年秋からようやく飲食コーナーがオープンした。飲み物とスナックの自販機のほか、昼食時は学食からのデリバリーも行われる。

写真 4-⑩は展示&閲覧ホールスペース。以前は定期的に展示を行っていたが、今では主にグループ学習の場として多く利用されている。ここも飲食可能エリアとなっており、館内での飲食

場所確保についてはドイツの多くの大学図書館が重視している。



写真 4-⑨



写真 4-⑩

写真 4-⑪は、他の大学図書館でも設置してあったブックスキャナ。ここでは複写室だけでなく、閲覧席のエリアにも置いてあった。資料を傷めずに複写ができるブックスキャナの利用価値は高いが、著作権の問題から日本の図書館で利用者用に設置しているところは少ない。今後、利用者にとっての利便性向上の観点から、日本でも導入を検討していくべきだろう。



写真 4-⑪

Ⅲ-4-3 神学部図書館の見学

マールブルク大学には中央図書館の他に 38 の学部・研究機関図書館がある。そのうち、旧市街の歴史地区にある神学部図書館は、16 世紀の大学開学当初は講義棟として使用されていた歴

史的なゴシック建築が使われている。写真 4-⑫はその神学部図書館の入口付近。写真 4-⑬は、廊下突き当たりの出窓部分に設えられた閲覧席。



写真 4-⑫



写真 4-⑬

写真 4-⑭は、昔から謁見用の広間として使われてきたホールで、今でも賓客を迎える際に利用されている。普段は閲覧ホールとして使用され、飲食可能スペースとなっている。

厚さ 1 メートルの壁に囲まれた図書館内では、様々な意匠が施された壁や窓枠や柱、木製の梁で組まれた天井の高さまで達する書架などが目を引き、さながら古城の中にいるような気分になる。館内は、夏はひんやりしてとても過ごしやすい反面、冬は暖房がなかなか効かず寒いということだったが、長期間利用できるロッカーや、きれいにリフォームされたPC設置の閲覧室もあり(写真 4-⑮)、また飲食可能なスペースも設けるなど、時代に即した利用者のニーズにも対応していた。



写真 4-⑭

このような歴史と風格があり、かつ新しい機能も備えた図書館は、利用者(学生)にとって、歴史ある大学の学びの場にいることを実感できる絶好の環境であると感じた。



写真 4-⑮



写真 4-⑯

Ⅲ-4-4 レクチャー:「学びの場」としての図書館

カイザー氏によるパワーポイントを使ったプレゼンにより、標記のレクチャーを行って頂いた。以下はその要旨。

昨今における以下のような状況の変化により、図書館の在り方も大きく変わってきた。

- ① 様々な電子資料(データベース、授業用電子教材、デジタル雑誌・書籍等)の大幅な普及
- ② 目録、蔵書検索システムの急速な電子化
- ③ Eラーニング等、パソコンを利用した教育の普及
- ④ ドイツの学位システム変更による新カリキュラムの導入がもたらした授業形態の変化⁴

旧来の図書館は、本を保管・管理することと、それを利用者に提供することが主な役割で、利用者のための施設としては、大きな閲覧ホールと教員用の個室が用意されている程度であったが、上述したような状況の変化により、「学びの場」としての図書館の役割が注目されるようになった。このために、図書館ではこれまでに以下のような対策を講じてきた。

- ①と②については、PC 設置席や OPAC 用端末の大幅な増設
- ③については、PC 教室の設置
- ④の状況変化によって、短期間に多くの科目を履修する学生や、グループ学習が求められる授業が増加した。このため、個人閲覧席だけでなく、グループ学習室への需要が大幅に増加した。用途に合った学習の場を求める声は利用者アンケートの結果からも明らかで、カード目録のスペースや展示スペース、事務スタッフのスペースから閲覧スペース、グループ学習室へのリフォーム等を行った。

その際忘れてはならないことは、そのような学習スペースに、長時間滞在できるような快適性を

⁴ ドイツの大学では、最初の学位取得まで平均 6 年程度かかる旧来のシステムから、大学改革により、2010 年以降、より短期間で学位を取得できる世界共通のシステム (Bachelor/Master) へ移行された。

配慮すること、また、飲食エリアなどの休憩スペースを提供することである。これを踏まえ、ホワイエの改修やカフェテリアの設置、また、快適なラウンジや親子室の増設などが検討され、一部実現されている。

Ⅲ-4-5 新図書館の紹介

ロイター氏により、パワーポイントと模型を使って2017年竣工予定の新図書館について紹介して頂いた。以下はその要旨。

新図書館は町の機能や景観に十分配慮されて設計された。旧市街の教会や既存の建物と色や材質でも揃えた外壁材が使われる。

マールブルクの町は丘の上にある旧市街と、その下に広がる新市街に分かれているが、新図書館は新旧の町の「出会いの場」としての機能も持つ。ガラス張りのエントランスホールは、両翼 200メートルに及ぶ建物を左右に切り分ける役目も果たしている。



マールブルク大学図書館ホームページより

現在は中央図書館と 11 の分館に分散されている資料が 1 か所に集められ、蔵書数 250 万(開架資料 190 万)の学際的な図書館が生まれる。アトリウムは図書館のホワイエとしてだけでなく、様々なイベントの場として活用され、新図書館は活発な「学びの場」のみならず、学生や市民にとっての「文化の中心」となる。

Ⅳ 「学びの場」としてのサービス、施設についてのまとめ

図書館を「学びの場」と捉えてサービスや設備を充実させることは、日本の図書館でも積極的に行われているが、今回訪問したドイツの 4 つの大学図書館では、日本ではあまり行われていないサービスや設備がいくつか見られた。ここではこれらを中心に、訪問した図書館のサービスと施設についてまとめる。

① 館内で長期間利用できる個人用のロッカーやワゴン

図書館資料を個人利用のために一定期間(1 か月~6 か月)図書館内に確保しておくことができるロッカーやワゴン。図書館資料だけでなく、個人の教科書や辞書等も入れておけるため、図書館に勉強道具一式を保管しておくことができる。

② プリペイドカードのチャージ&支払機

図書館内での印刷や複写、延滞金の支払いに利用できるカード用機器

③ 離席時用の時刻表示盤

離席時に一時的に席を確保するための時刻表示盤。表示の時刻から 30 分~60 分間閲覧席を確保できる。

④ 利用者用ブックスキャナ(オーバーヘッド型)

資料を傷めることなく上からのカメラでスキャンできるブックスキャナ。持参したUSBスティック等の記憶媒体に自由に保存できる。

⑤ 図書館オーディオガイド

QRコードを読み込んで聴く館内施設や資料の利用案内音声ガイド

⑥ カフェテリア(飲食エリア)

⑦ 耳栓販売機

⑧ 親子室

子供を持つ利用者用の個室。他の利用者に気兼ねなく、親が小さな子供の様子を窺いながら勉強ができるスペース。

⑨ 延滞金

図書館資料を延滞した場合に科せられる延滞金は、「学びの場」とは直接関係しないが、日本ではあまり導入されていない制度であるため、調査項目に加えた。

上記①～⑨について、各訪問先図書館での実施状況を下表にまとめた。

	Duisburg-Essen	Bremen	Münster	Marburg
ロッカー	○	○	○	○
ワゴン	○	○	×	(制度を廃止)
チャージ&支払機	○	○	○	○
時刻表示盤	×	○	○	×
ブックスキャナ	○	(通常型スキャナ)	○	○
オーディオガイド	○	×	○	×
カフェテリア	×	○	○	○
耳栓販売機	×	○	○	○
親子室	(親子コーナー)	○	○	○
延滞金	○	○	○	○

このように、日本の大学図書館では一般的とは言えないサービスや設備が、ドイツでは通常のサービスや制度として行われている状況を知ること、私達が利用者サービスに携わる上で、普段あまり想定しないサービスについても、検討や改善を始める余地があることに気づくことができるのではないだろうか。

V 帰国後のアンケート調査

訪問時に伺った話の内容をまとめるに当たり、以下の項目についてアンケート形式でコメントを記載して頂いた。

- ① カフェテリア(飲食エリア)を図書館内に設置すること
- ② 従来型のレファレンスではない新しいレファレンスのアイデア
- ③ ゾーニングを行うことの重要性
- ④ 「学びの場」の展望
- ⑤ 延滞金以外の延滞対策
- ⑥ 館内での利用者のリフレッシュについて

上記①～⑥について、項目ごとに各館から頂いたコメントを紹介する。

V-1 カフェテリア(飲食エリア)を図書館内に設置することについて

最近では、特に新設の図書館を中心に飲食エリアを設ける図書館は日本でも増えている。しかし、全体から見た割合では今でも1割に満たない。滞在型の図書館を目指すうえで、館内の飲食場所確保についての考えを伺った。

[デュースブルク=エッセン大学]

カフェテリアを作って欲しいという利用者からの要望は常に多く寄せられていますが、現時点でカフェテリアを設置する予定はありません。

[ブレーメン大学]

2014年10月6日より図書館内に60席の小さなカフェテリアがオープンします。基本的に軽食や飲み物の提供は自動販売機で対応しますが、カフェテリアは「学びの場」の一部であると考えています。

[ミュンスター大学]

カフェテリアは、リラックスしたり気分転換したりできる場所であるだけでなく、学生同士が勉強について気が付いたことや、疑問点について気軽に話し合える場所にもなると考えています。

[マールブルク大学]

カフェテリアは長年設置が望まれており、大変な苦勞の末、ようやく自動販売機での飲食物提供という形で実現しました。

ブレーメン大学が、カフェテリアは「学びの場の一部である」とコメントしているように、館内に飲食場所を設置することは大変重要視されている。リフォームを機にカフェテリアを設けた館(ブレーメン、ミュンスター)もある一方で、既存のスペースにカフェテリアを設置したり、飲食禁止だった場所を飲食可のスペースにしたケース(マールブルク)もあり、訪問時にスタッフから話を伺ったときの感触も含め、飲食場所の提供はどの館にとっても殆ど使命のようなものになっていると感じた。

V-2 レファレンスの在り方について

特定のカウンターで時間を限って行うレファレンスサービスは、古くから行われている図書館サービスの一つであるが、図書館を「学びの場」として重視するようになった昨今において、従来通り

のレファレンスサービス以外に利用者に提供できるサービスの可能性について伺った。

[デュースブルク=エッセン大学]

従来のカウンターでの案内の他に、Eメールによる相談受付も行っています。また、新たな対応方式として、チャットやウェビナー(webinar)で相談受付を行うことを検討しています。

[ブレーメン大学]

こちらから利用者へ歩み寄り、困っていることや相談がないかを積極的に聞き取る「ウォーキングライブラリアン」は一つのアイデアになるでしょう。ただ、この案はまだ実現していません。

[ミュンスター大学]

例えば、テクニカルな問題や情報について支援するチームなど、現在、新しい専門的な情報提供サービスの実施について検討しています。

[マールブルク大学]

(コメントなし)

筆者は、日頃の業務として当番制でレファレンスカウンターに入っているが、フロアの一角にあるカウンターまで足を運んで相談に来る利用者が非常に少なく、このような従来の形でのレファレンスサービスでは不十分なのではないか、という気持ちから、このような質問を行った。ブレーメン大学が提唱する「ウォーキングライブラリアン」は、日本の図書館でも「フロアワーク」として実行しているところが少なくないが、昨今はツイッターやフェイスブックなど SNS を使って情報提供サービスを行っている館も増えている。この件については、ドイツは日本の状況と類似していると感じた。

V-3 ゾーニングについて

館内の利用者エリアをゾーニングすることの重要性について伺った。

[デュースブルク=エッセン大学]

ゾーニングは大変重要だと考えます。利用者はそれぞれに違った利用目的があり、静かな場所で集中して勉強したい利用者もいれば、グループで相談したり、プレゼンの準備などをしたい利用者もいるからです。

[ブレーメン大学]

静粛ゾーンと、話ができるゾーンに分けることは大変重要だと考えています。しかしながら、現在は、建物の構造上の問題から実現できていません。

[ミュンスター大学]

ゾーニングは重要だと考えます。このため、コンピュータなどの機器の利用を禁止している静粛ゾーンを用意しています。閲覧席だけでなく、図書館内の利用者エリア全体のゾーニングが重要だと考えますが、残念ながら当館ではグループ閲覧席をごく少数しか用意できていません。

[マールブルク大学]

貴重書閲覧については、スタッフの監督の下に閲覧ができる部屋があります。閲覧時の質問に答えたり、閲覧席の照明の状況をチェックする上でこのような場所が必要とされています。

「ゾーニングは重要と考えますか」という質問設定を行い、「重要である」という回答だけでなく、独自のコメントを期待したが、何を聞きたいかがうまく伝わっていなかったと反省している。ただ、用途に合ったゾーニングが重要であるという認識では一致しつつも、それを満足できる形では実現できていない状況が多いことは把握できた。

V-4 「学びの場」の展望について

[デュースブルク=エッセン大学]

利用者が集中して勉強ができる「学びの場」「滞在の場」としての図書館の役割は大変重要視されており、その重要度は年々増している、対策が講じられていますが、まだ改善の余地が多く残されています。

[ブレーメン大学]

「学びの場」として図書館が担う役割は大変重要だと考えます。完成間近の改築でも、この点についての質の改善を心掛けました。学びの場としての図書館についての計画は、2020年に向けた長期的な展望計画や、2年毎に行われる代表者会議の場で、文書で契約を交わして確定していません。

[ミュンスター大学]

現在検討中の新しい専門的な情報提供サービスでは、学びの場としての図書館が重要な役割を担うこととなります。

[マールブルク大学]

(コメントなし)

「学びの場」という漠然としたテーマについてのコメントをあえて求めることによって、思いがけない意見などが得られることを期待したが、普段このテーマについて目にする意見からかけ離れたコメントは得られなかった。しかしながら、ブレーメン大学のように、「学びの場」としての図書館の重要性を説くだけでなく、具体的な長期計画(計画の詳細については記載はなかったが)を策定して実行している例があることは、大いに参照すべき点と言える。

V-5 延滞対策

延滞金以外に資料延滞を防ぐ対策が考えられるかを伺った。

[デュースブルク=エッセン大学]

スマートホンで貸出期限日の通知設定ができます。

[ブレーメン大学]

延滞金以外の対策は行っていませんが、延滞金は大変有効な手段と考えます。

[ミュンスター大学]

延滞金が科せられる前に、メールで貸出期限日の通知を行っています。

[マールブルク大学]

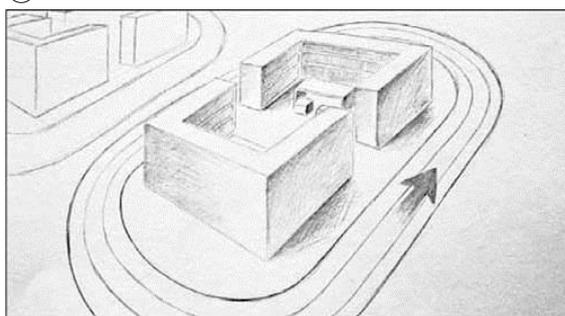
延滞金以外の対策は特に考えていません。

図書館資料の返却を延滞した場合に延滞金を徴収するルールは、ドイツの図書館では公共図書館・大学図書館を問わずごく一般的に行われており、延滞を防ぐ手段として一定の効果が得られている。このため、これに代わる、或いはこれに加えての延滞防止対策についてはあまり関心がないように感じられた。

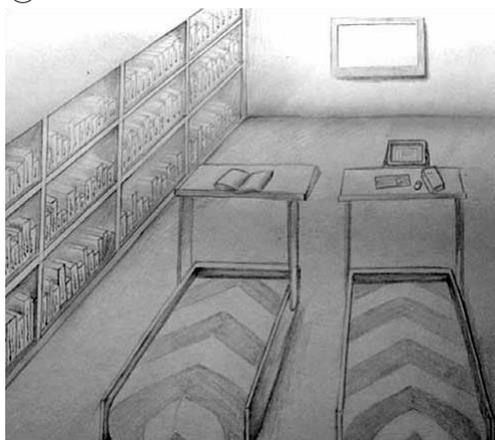
V-6 館内での利用者のリフレッシュについて

ドイツの公的機関 DINI が、2009 年に「生きた学びの場」をテーマに全国規模で学生に「快適な図書館像」について募ったコンテストの講評集に掲載されていた案のなかで、利用者が館内でリフレッシュするための以下のような大変ユニークなアイデアがあった。

①



②



説明には、①は「体をリラックスして勉強の能率を高める動く道」、②は「動くベルトの上で読書を楽しむ」とある。どちらも閲覧席にベルト式の動く歩行帯を設け、①はブース内で勉強に疲れたらその周りを動くベルトに乗って散歩をする、②は動くベルトの上で歩きながら勉強や読書をする、というもの。

筆者は、日本では想像もつかないような発想が、コンテストでのアイデアの例として公の冊子として公表されていることに興味を持ち、実際にこのアイデアをどう思うかを伺った。

[デュースブルク=エッセン大学]

リフレッシュしたいときは図書館の外に出るべきだと思います。このような騒音をもたらす電動ベルトを閲覧席の隣りに設置することは意味のあることだとは思いません。新鮮な空気を吸い、体を動かすことは必要ですが、閲覧席の周辺で行う必要はないでしょう。

[ブレーメン大学]

DINI に掲載されている例を見る時間はありませんでしたが、図書館内で利用者がリラックスできるスペースを作ることは重要だと思います。このため、リニューアルした閲覧ホールにはソファやクッションを置いて快適なラウンジを用意しました。入退館ホールには既に 10 年来、同じような快適な休憩スペースがあります。

[ミュンスター大学]

個人的な見解としては、このような形のスペースは当館では無意味と考えます。当館の周辺には緑も多く、10 分もかからず植物園まで行くことができ、そこで散歩をしたり、落ち着いて考え事を行うことができるからです。当館ではスペース上の問題もあります。私自身は、運動しながら同時に読書しようとすると、集中できずにどこを読んでいるかわからなくなってしまいます。そんな能力がある人に興味を覚えます。ただ、こうした試み自体は意味があるとは思いますが。体を動かしたり、リラックスする時間というのは、質の良い学習を持続させるためには考慮すべきだと思うからです。「学ぶ」ということは、私の考えでは、その人自身が自ら様々な要素を動員して作り上げる作業ですが、この際、外的要因に影響されることも大きいと言えるでしょう。

[マールブルク大学]

実現性を考えればこれは無意味でしょう。リフレッシュしたければ館外に出ればいいわけで、そうすれば植物園もあるわけですから。例えばフィットネスルームなどを館内に設置できればいいのかも知れませんが、それは新図書館でもスペース的に無理です。

私達日本人の想像を超えた突飛とも思えるアイデアに対し、回答者の方々は真面目に考えてコメントをくださった。しかし、図書館内にこのような設備を設けることについて肯定的に捉えた意見はなく、「ドイツではこんなアイデアが真剣に取り入れられようとしているのではないか」という筆者の淡い期待は外されてしまった。それでも、滞在型の図書館にとっては、近くにリフレッシュできる公園などがあることが、日本以上に重視されていることを回答から感じる事ができた。

VI おわりに

訪問した大学図書館では 2~4 時間に渡り、館内の案内やレクチャーなど、大変丁寧な対応をして頂いた。プライベートな訪問であるにも関わらず、勤務時間を割いて対応して下さった各図書館のスタッフの方々に、改めて感謝を申し上げたい。

特に、筆者の訪問についての受け入れ準備から現地での案内まで、中心になって担当して下さったデュースブルク=エッセン大学のドロテー・グラフ氏(Frau Dorothee Graf)、ブレーメン専門単科大学のマルティナ・フィッケン氏(Frau Martina Ficken)、ミュンスター大学のカトリン・シュタイナー氏(Frau Katrin Steiner)、マールブルク大学のリディア・カイザー氏(Frau Dr. Lydia Kaiser)には、格別の感謝を申し上げたい。

今回の訪問を機に、こうした方々と今後とも日独の図書館事情についての情報交換・意見交換などを行いつつ、緊密な関係を続けて行けることを願って止まない。

VII 参考文献、および URL

<文献>

- ・Jahresbericht 2012 -Universitäts- und Landesbibliothek Münster-
Universitäts- und Landesbibliothek Münster, 2013
- ・Benutzerbefragung der Universitätsbibliotheken NRW 2011 -Auswertung und Maßnahmen
der UB Duisburg-Essen-
Universitätsbibliothek Duisburg-Essen, 2011
- ・Magazin "ulb" -Universitäts- und Landesbibliothek Münster-
Universitäts- und Landesbibliothek Münster, 2010
- ・Universitätsbibliothek Duisburg-Essen -Ihr Informationsbedarf -unser Auftrag!-
Universitätsbibliothek Duisburg-Essen, 2009
- ・"Lebendige Lernore" 2009 -Betrachtungen der DINI-Arbeitsgruppe "Lernräume"
Deutsche Initiative für Netzwerkinformation E.V., 2009
- ・はじめてみよう！図書館サービス・スタートブック
私立大学図書館協会東地区部会研究部 2012/2013 年度パブリック・サービス研究分科会,
2014

<URL>

- ・Universitätsbibliothek Duisburg-Essen 最終アクセス日:2014 年 10 月 13 日
<https://www.uni-due.de/ub/index.php>
- ・Staats- und Universitätsbibliothek Bremen 最終アクセス日:2014 年 10 月 13 日
<http://www.suub.uni-bremen.de/>
- ・ULB Münster 最終アクセス日:2014 年 10 月 13 日
<http://www.ulb.uni-muenster.de/>
- ・Die Universitätsbibliothek Marburg 最終アクセス日:2014 年 10 月 13 日
<http://www.uni-marburg.de/bis>